
素顔

神崎 奈哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素顔

【Nコード】

N1893B

【作者名】

神崎 奈哉

【あらすじ】

東の名探偵にインタビューをしてみた。彼が答える内容とは？クールな名探偵が怒る時、何が起るのか・・・素顔を暴いてみようではないか。

（前書き）

かなり前に書いたので、雑です。言い切れます、はい。

今日新一は、雑誌の取材がある。最初は、断るつもりだったのだが、断りきれなかった為、仕方なく引き受けた。

「工藤君、こっちこっち」

「あ、初めまして。工藤新一です」

さすが工藤家というか、見事な笑顔である。

「早速だけど、質問良いかな？」

「ええ。勿論」

「何故、探偵になろうと思ったんだい？」

彼にとって最も初歩的な質問である。

「父を越えたかったのとコナン・ドイルの書くシャーロック・ホームズが好きだからって言うのが主な理由ですね」

「そうなんだ。お父さんというと世界屈指の推理小説家、工藤優作先生だよね？お父さんの作品は読むの？」

「一応、読みますよ」

優作が、送りつけてくるので買ったりはしないが。

「何歳くらいから現場に行ったりしていたの？」

「はつきり覚えていませんが、4、5歳から父について行っていました」

「ええ？すごいね！そんな小さい頃から・・・」

優作は家にいる間はずっと仕事で、遊んでもらった記憶のない新一だが、現場にだけは幼い頃から連れて行ってもらっていたのだ。た。

「今まで解決してきた事件って殺人事件だけではないよね？」

「はい、色々ありましたよ。強盗を捕まえたり、人探しだったりなど」

コナンであった頃のはなしだが、事実である。

「そうなんだ。じゃあ、なんでもいけるんだね」

「そうですね。大体は引き受けますよ」

蘭とのデート中だった場合、たまに断るが。勿論、理由は伏せて「そうだ。西の名探偵 服部平次君とは、西の服部 東の工藤と呼ばれて比べられてるけど、自分の方が上だと思う?」

「いいえ。推理に上も下ありませんよ。真実はたった1つですから。服部も優れた探偵の1人・・・大切な友人です」

さらりと言う新一に目をみはる。そして、これ以上聞くのはヤバだと思い、質問をかえる。

「そういえば、工藤君って彼女いるの? あ、こんなに格好良ければ、当たり前か」

「当たり前前って訳じゃ・・・」

「え!?! もしかして、居なかった!?!」

新一が苦笑したのを勘違いして驚く。本人にイケメンの自覚が無い故の苦笑だったのだが。

「いえ、居ますけど・・・」

「あ、良かった。でも、告白とかいつもされてるでしょ? 彼女より可愛い娘がいたら、かえちゃう派?」

この記者とんでもない事を聞いてくるものだ。丁度その時、

「あ、工藤!」

クラスメートが喫茶店に来た。一緒に居るのが雑誌記者だと薄々感付いていたようだったが、構わず話掛けてきた。

「工藤君の友達? 丁度良かった。聞いてもいいかな? 工藤君って彼女より可愛い娘がいたら、かえちゃう派?」

その質問に顔を見合わせ笑った。絶対にありえないのだから。

「まさか。てか、工藤の彼女はかなりの美人なんで、ありえないですよ」

「そうそう。逆に告られたりしてますから」

ちよつと言ってはならない事を言ってしまった。新一から冷たいオーラが出ている。

「へえー工藤君も大変なんだー」

「自分も告られまくってますけどね」

ニヤニヤ笑いながら、告げた。それが更に新一を怒らせた。

「質問は以上ですか？」

さっさと終わらせたくなったようで、かなり追い立てる。

「あ、最後に1つだけ。休学中はなんで表にでてこなかったの？事件の調査だったら、表にでた方が良かったんじゃないの？」

「Need not to know.」

「え？」

間発をいれずに返答した内容に驚きが隠せない。

「最後の1つでしたよね？これで失礼します」

席を立ち、出口へ向う。その先には蘭が居て、新一が来るのを待っていた。記者は彼女だと分かったが、何もなかった。写真を撮り公開などしたら、工藤家からどんな報復をされるか分かりきっていたからである。

「（いつもクールな工藤君があんな表情を・・・）」

いつもクールな新一が幸せそうに笑っていたから。邪魔をしてはいけない事を本能的に理解したのだ。

後日でた雑誌には、こう書かれていた。

東の名探偵 工藤新一の素顔は分からなかった。

真実を求め、謎を解き続ける彼の素顔ははかりしれないものだった。

とね。それを見た新一は、苦笑を浮かべただけだったとか。

あまりにも簡潔で正しい内容だと分かったのは、ごく一部だけだ
ろう・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1893b/>

素顔

2010年10月28日05時56分発行